

二 人生の表裏、人心の明暗

處が人の心は何時も上天氣といふ譯に參らず、雲が出て風が吹いて、猛雨
沛然霹靂轟震と云つた有様にまで至らずとも、常に亂れて統一が缺けて、矛
盾が出来易いのです。いつもそんな風です。矛と盾とを商ふ人があつて、矛
の銳利を賞しては、「此の矛は如何なる盾をも、貫き通して、何等の障礙する
ものもない」と云ひ、盾の堅牢を讃じては、「この盾は如何なる矛をも、能く
支へて、決して之を破るものはない」と。意氣揚々たる處へ、「乞ふ、汝の矛
を以て、汝の盾を突かば如何」とやられて口あんぐり。矛の銳利を賞せんか、
盾の堅牢を捨てざるべからず、盾の堅牢を讃ぜんか、矛の銳利を捨てざるべ
からず、立つるが非か、捨つるが是か、此の間自分が自分で板挟にかゝつて
居るのである。時人之を稱して矛盾と云ふ。去る田舎代議士、之をホコトン
と讀み來つて後人之に倣ふあり。矛盾、ほことん、とんちんかん。我等の思
想に生活に、此事の甚だ多きを悲しむ。看よ、之を自己内心に省察して。
夕暮の忙しい時來客がある。心の内では、またか、早く歸ればよいと思
つても「マア久し振り、恰度よいところ、サアお上りなさい」と挨拶する。
悟りよくさつさと歸ればよいが、何時までも長尻すゑて話される。此時口と
心とは決して一致しない苦痛を感じる。恚いふ場合には早く歸らす祕法があ
るさうな。箒に手拭を被らせて立て、置く、屹度早く歸るさうな。そんな事
とは夢にも知らぬ子供は無邪氣なもの。意氣揚々お父さんに見せる積か、お
祕法の箒をかついで、お客さんの前に躍り出た。「マア御ゆつくり」と云ふ口
の下から、そんなお祕法をする。是が矛盾でなくて何か。

之と同じく、有るくといふ人は、屹度お金を持つて居らず、儲けたく
と云ひふらす人は、定つて損をして居る。貧乏人に限つて無駄使をする。金

持はいつも無いくと口癖のやうに云ひ、儲けた者は損だくと云ひ、金持は決して金を使はない。人の遊ぶ時に働く者は、必ず平生人の働く時遊んで居る。これも矛盾の甚だしいものであらう。手拭一筋嬢に惚む奴は、藝者や女郎に二三枚の着物を惜まない。咄這の矛盾漢。灰汁水で目でも洗つて來い。

實際人間ほど嘘で固めた動物は又とあるまい。口と心とは何時も裏腹になつてゐる。仲々本音を吐かぬ。とはいへ、あの通り心からの本音を吐いたら此世は大變になるかも知れぬ。「外に賢善精進の相を現ずることを得ざれ、内に虚假を懷けばなり」。嚴しい御意見である。併し世の中は一通り、それで行くから不思議。

此處に二人の男があつて、軒を並べつゝ共に貧乏であつたとする。處が一人は勉強の加減にも因るであらうが、運が向いたのか、段々とお金を蓄へて二三年経たぬ中に、家屋敷買うて氣樂な身の上となつた。サア今一人の男、妬けてく仕方がない。「忌ま忌ましい、彼奴二三年前迄は赤貧乏であつたのが、俺を残して先に身代造りやがツた、何か彼にケチでも付けばよいが」位に思つて居る。何もその男の知つた事でない。一人は働いて溜めたし、一人は遊んで溜めないからで、決して他を怨む筈はなく、却て自分の怠惰をこそ惡まねばならぬのに、「好き仲も近頃悪くなりにつけり、隣に倉を建てしより後」。表面は變らんでも内心は仇敵。すると隣の長男が急病で死んだ。一人の方は喜ぶまいことか。「これで腹が癒えた、虫は治まつた、埋合せがついた」。酒でも買ふたかも知れぬ。けれど隣へ行つた時は、悲し氣に四角張つて「誠に云何もお氣の毒な、掌の中の玉を落した様で、折角蝶よ花よと、大事にかけて居られたものを」とやる。腹の中では好い罰位に思ふ、併しそれで世の中は

ひととは
一通り濟む。

それを反對に心の儘をさらけ出して「お内には息子さんが死なれたさうな
お目出度うございます、昔は一緒に貧乏であつたのが、急に先を越され、私
は相變らずの貧乏、腹が立つて堪らず、御内に何かケチが付けばよいかと、
兼て待つて居ましたに、事幸此の度は御目出度う御座います、私は酒を
買うて祝ひました」と憚うやつて御覽、到底も御座がもてまい。世の中が立
つまい。それでせめてもの事に、表面は奇麗にする。

口と心と別にせねばならぬのは、第一心が間違つて居るからである。此心
を本として、佛法を修するの、往生の行をなすのと云つて、根本から間違つ
てゐる。すべて雑毒の善、虚假の行である。唯々如來御廻向の佛智を頂くの
外はない。「衆生をしつらひ給ふ、しつらふと云ふは、衆生の心を其儘置きて
善き御心を御加へ候ひて、善く召されなし候。衆生の心を皆取代へて佛智
ばかりにて、別に御仕立候とにてはなく候」。此心が佛智に融かされて一
體となる、それが信仰である。